

## 六朝期の仏教図像と山水画における靈性とイメージ

村田みお

山水を詩に詠うことと絵に描くこと、この二つの間には、言葉と形象という違いがある。しかしながら、両者の根底には山水という場の体験が共通しているだろう。山水詩と山水画を作るもととなるのは、山水そのものの中に身を置き、山水を五感で捉え、山水の中で心身を解放する体験である。そして、その体験をもとに言葉や形象で描写した作品は、見る者に山水の体験を想像させたり、想起させるのである。

山水画論の草分けは宗炳「画山水序」である。宗炳は廬山慧遠を取り巻く文人たちの一人であり、仏教の分野では「明仏論」を著し、また琴や書画、そして山水を愛する隠者として「画山水序」を書いた。筆者が過去に論じたように、宗炳は慧遠の神不滅論だけでなく、廬山における図像を手がかりとした観念念仏も継承している。「画山水序」では、山水の図像を描いたり見たりすることで、感応によって山水・絵画・観者の神が繋がれる。絵画というイメージを媒介として、山水の靈性、山水から絵画へ描き写された靈性、そして観者の精神が呼応し、精神が解放されるのである。

「画山水序」に続く山水画論は王微「叙画」である。王微は宗炳と同様に山水を愛した隠者だが、仏教との関係は特に見られない。「叙画」は顔延之からの書簡をきっかけに著された文章であり、書との関連や、山水画制作における用筆について等、「画山水序」とは異なる要素を持っている。

今回は既発表の宗炳「画山水序」の考察に加えて、王微「叙画」をも検討し、宗炳と王微が山水に身を置いた体験をいかに絵画にし、その山水画でどの様に解放の境地を得るとしたのかを考えたい。